



細巻
女化稿

何

幻阿竹尊迺聞書

島鮮堂壽梓

初編上

25

20

15

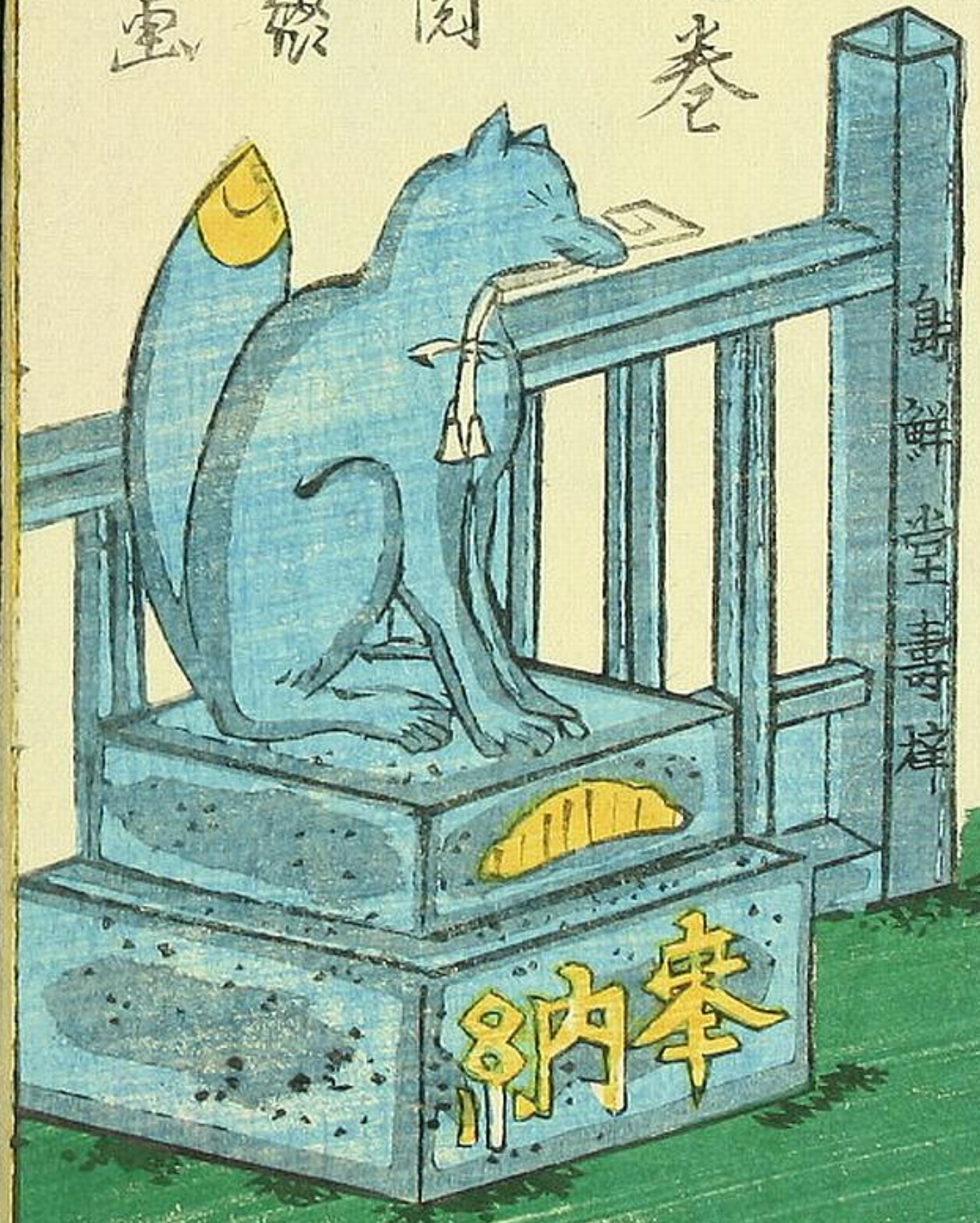
10

幻阿竹尊の写本

初編

上之巻

芳川春濤園
園本起泉綴
撰高府権丞



兼て東京新聞に掲げて御評判の預り近來の奸婦於竹の履歴の
其跡朦朧とを緯号の幻ふ均く未と判然せざる所あれど
既に聞得し噂たけを面白く書綴り又も三編讀切の合巻にの
せると例の寫鮮堂を需め小應り近頃有善世新聞と諸藝新
聞の掛持ち編輯の忙がしき起泉子朝飯前の仕事り
草稿と起させ余も亦報知新聞編輯の餘暇夜延仕事
之を校正し倉卒あし初編を發兌するややちたうね
看官幸いに愛覽を賜ひ夜長の徒然に勸懲の道と讀
分け玉りんよと願ふと云ふ

十四年一月下旬

芳川春濤題



丁可竹上



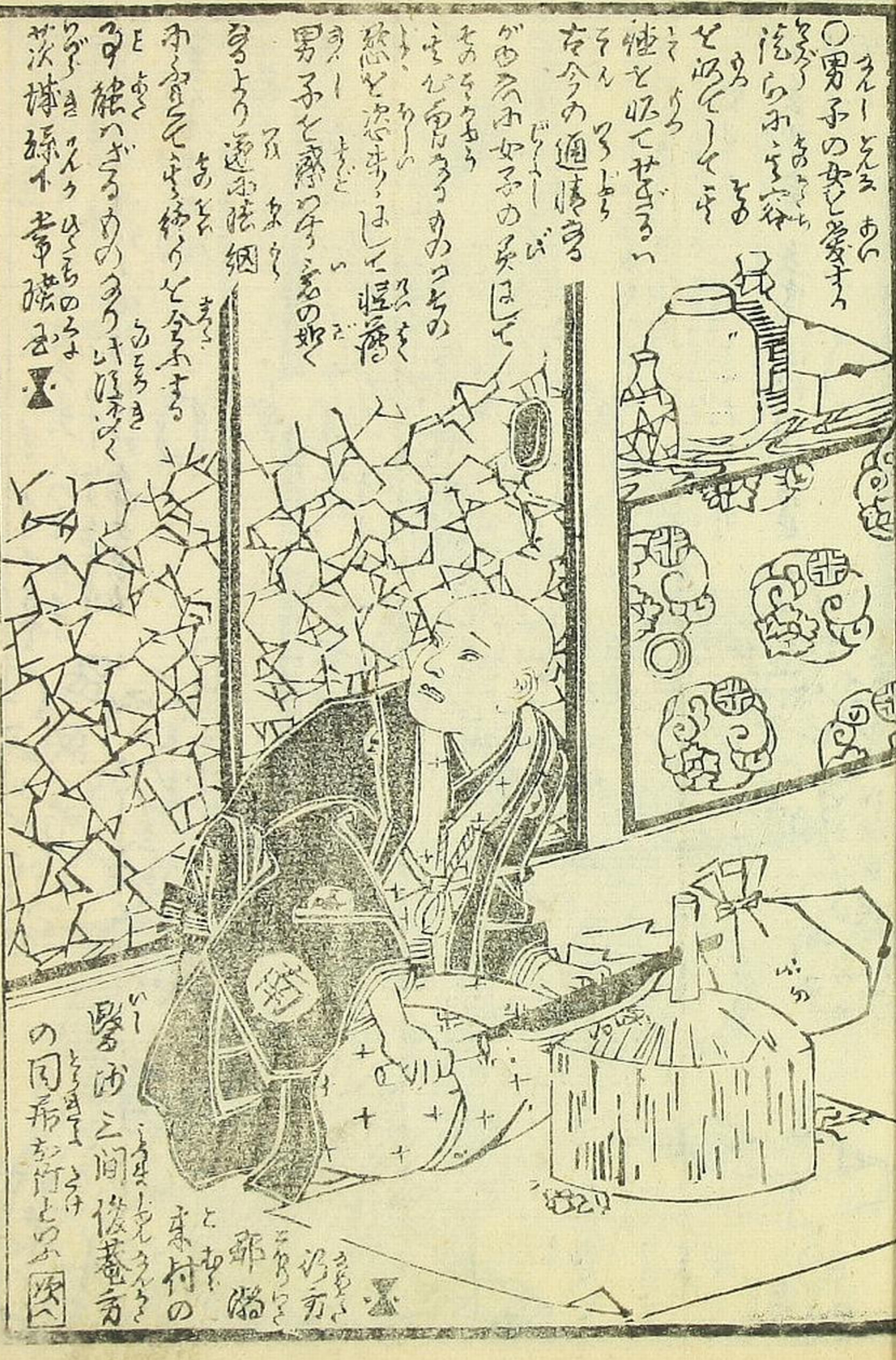
公阿竹

阿竹の母
於鳥

博徒
熊坂次

阿竹

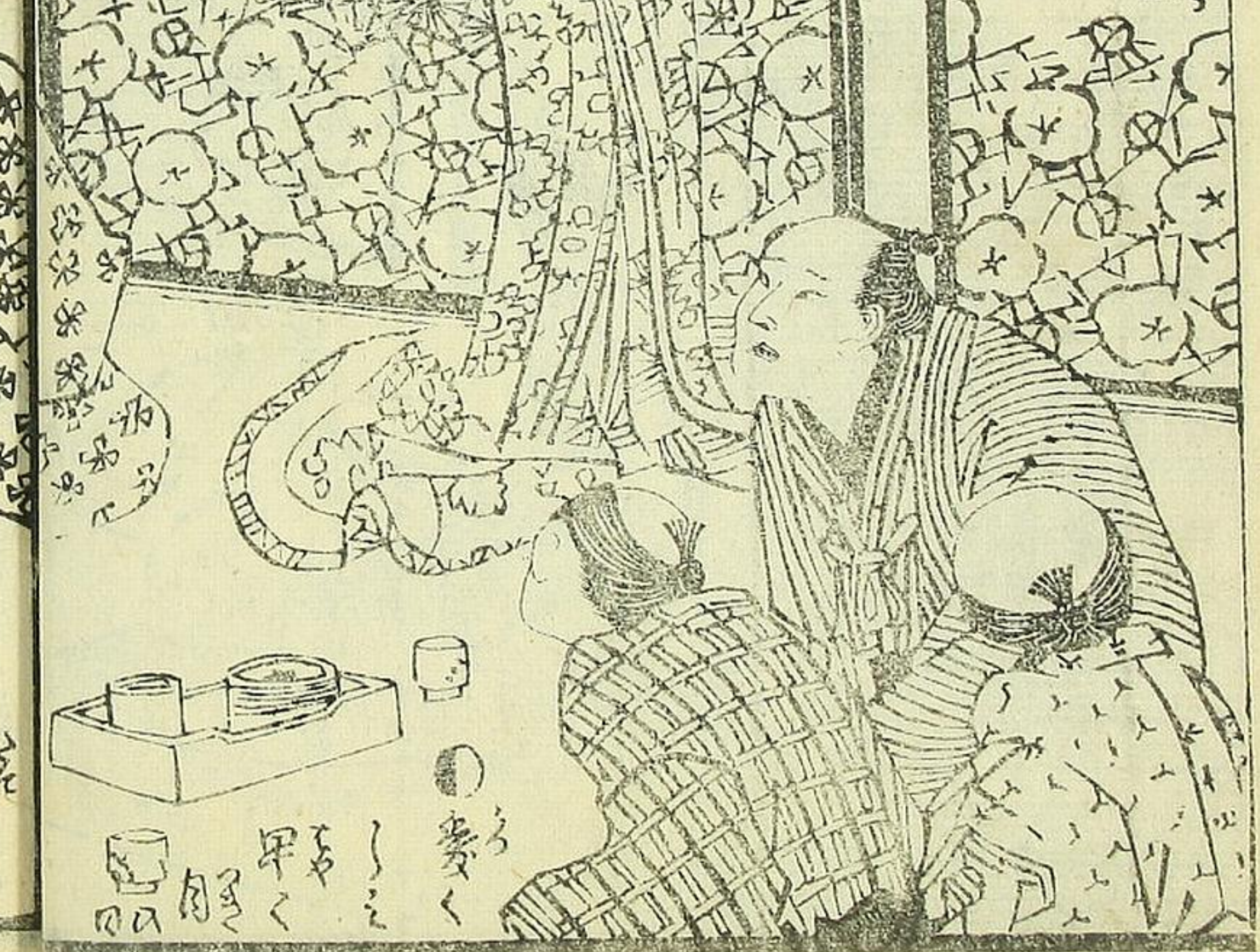
貸坐敷主人
中野屋徳三郎



○男子の女と愛する
花らふに容
と心してぞ
性と心とせむ
右今の通情者
かゆふ小女の笑はて
そのさうも
慈と恋と、はして狂
男子と感のやうの妙
身より遠く法網

醫學の同形を竹とひ
東村の
近
必
乃
乃
乃

母の志は...
 下宿...
 治多...
 由身...
 田舎...
 父勤...
 糸が...
 世...
 兄...
 今年二十五才の長女の長女



母の志は...
 下宿...
 治多...
 由身...
 田舎...

天の...
 色...
 興...
 婿...
 め...
 婿...



婿...
 め...
 婿...

今幸十四の節の
かみ脊丈の伸て人の

月のつらばりの月に
際るの物物奔の

冬の末燦
たのつらばりの

わがが同村の
賢源之間圭甫方へ

再振するのには
志を二白くか竹や実家へ

蹟一を哀しく思ひ
守は得んををか竹を付る

ひて引續り道の徳を
寄らあるまう夜夜を地

華兵とて「磨け」る
玉の恥をあらはせし

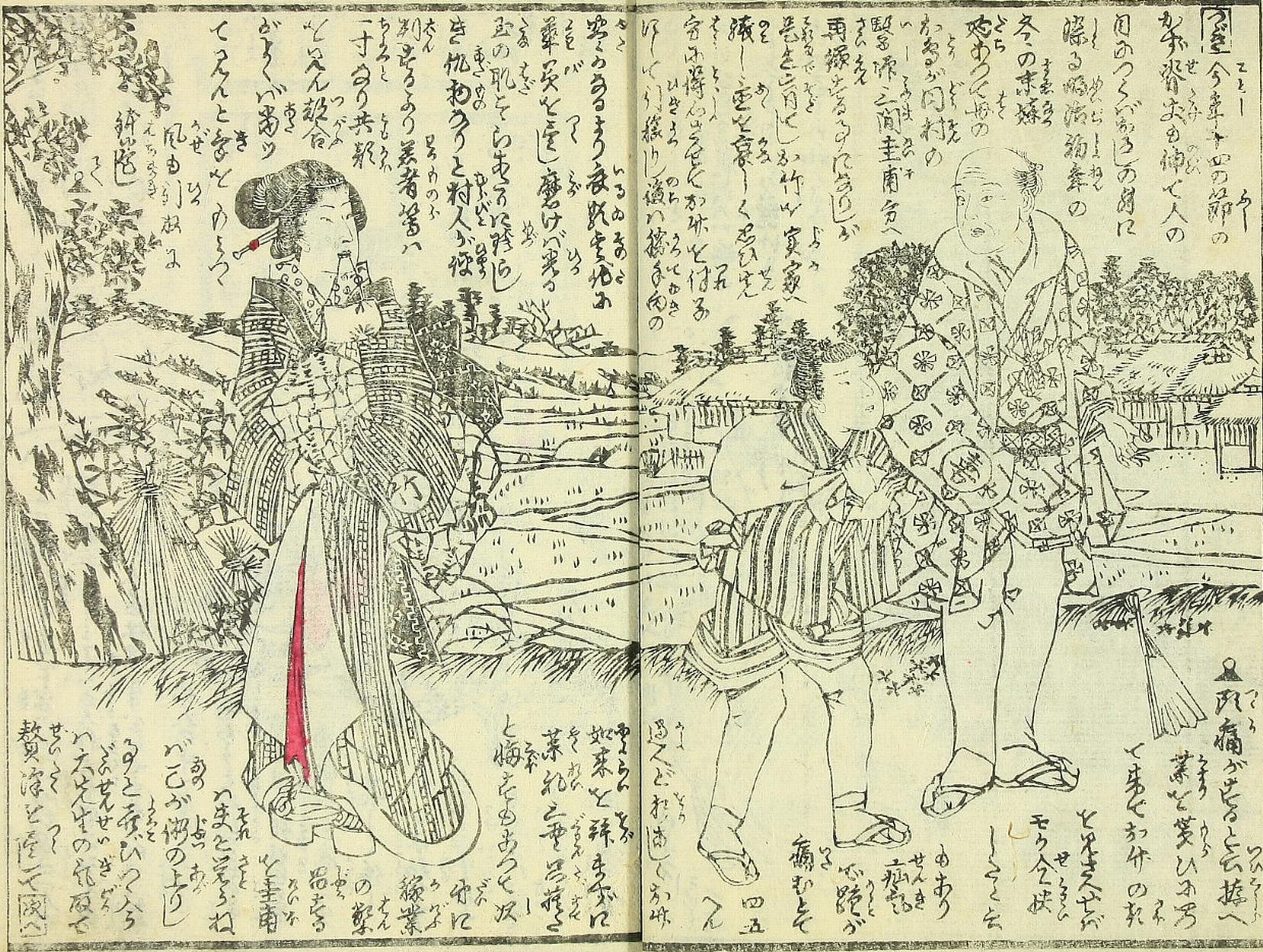
き枕わうと村人か
別するより美者等ハ

一寸の共叙
とんん教合

かまかいあッ
てんんとをせり

風由引およ
辨の階

可竹刃上



内痛がさると云持へ
業を笑ひおろ
て来てお竹のた

と果てんせが
モウ今伏
しこて云

ゆあり
せんき
二疳も
心路が
痛むと云
四五

過之どおれは
如來と孫まかに
業之を思は
と悔をもあつて

縁業
の繁
器も
とんん
とんん

かこが悔の上り
ゆとをいひつ今
ごんせいのき
いんせいのき
せいのき

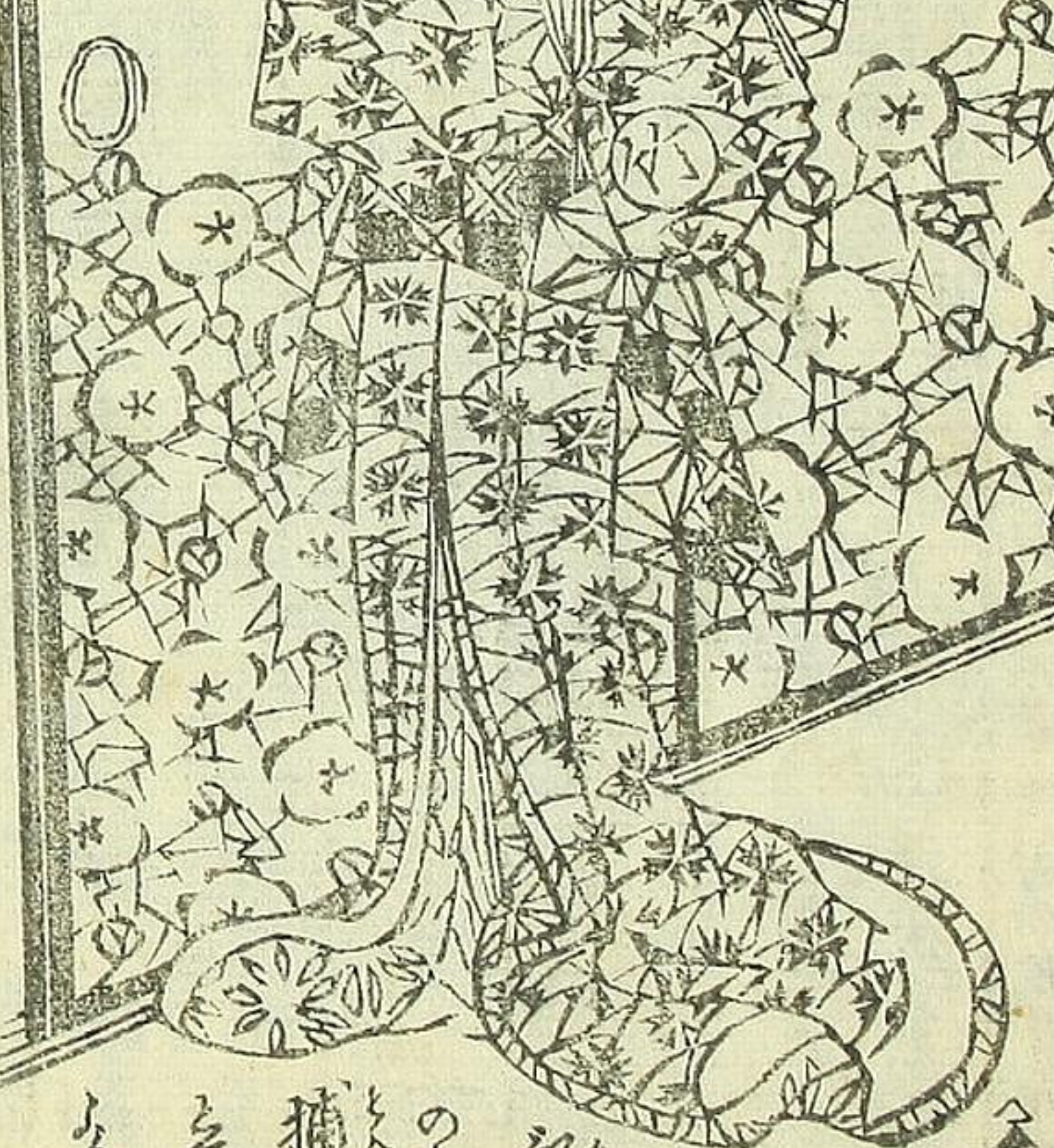
教興源とて
五

阿部新助

思ひありしつ保が代々の世
思ひありしつ保が代々の世
思ひありしつ保が代々の世

お母と多小お母
お母と多小お母
お母と多小お母

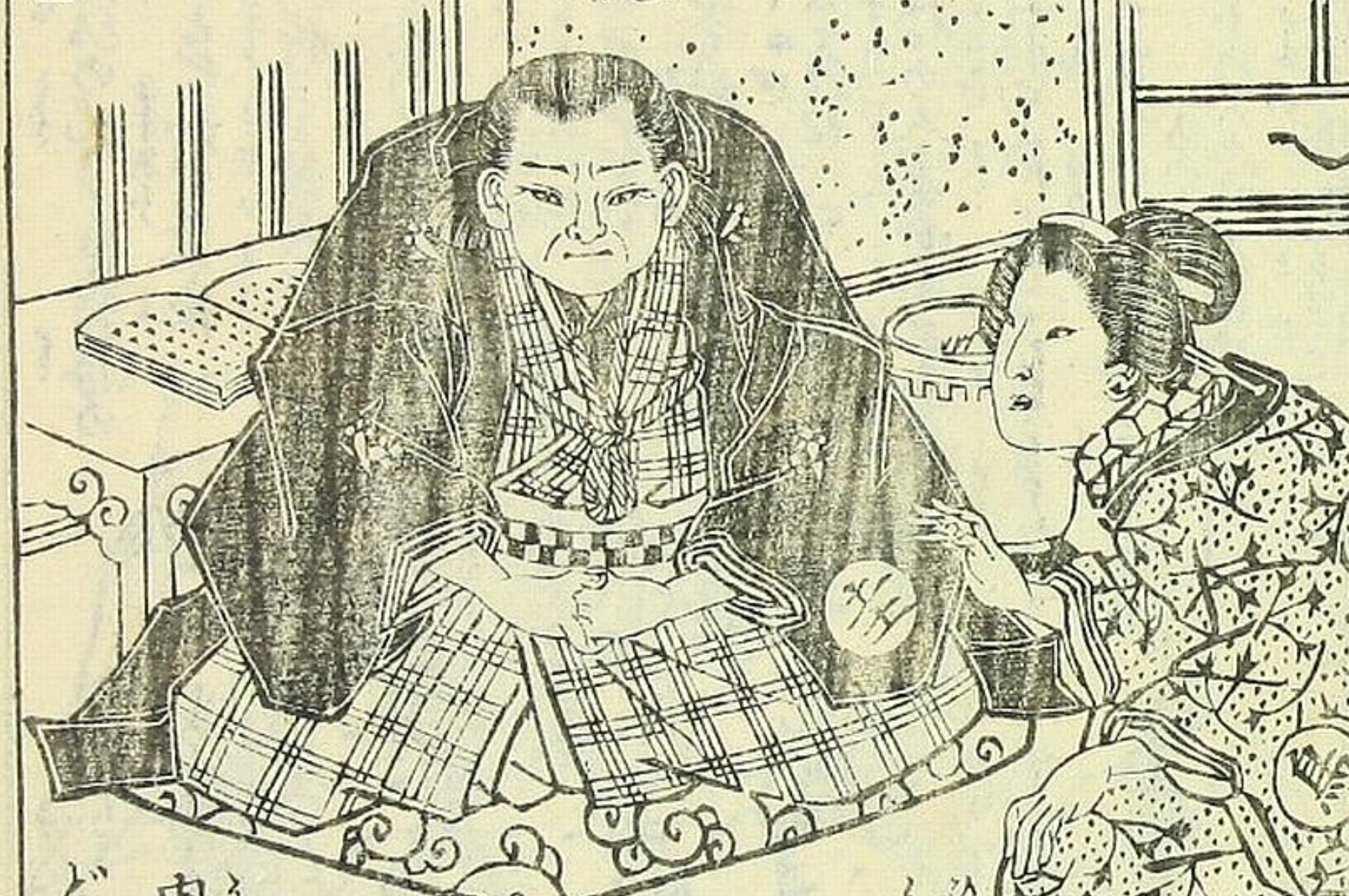
世帯とは氣配りと人
世帯とは氣配りと人
世帯とは氣配りと人



匣はあつた
匣はあつた
匣はあつた

何れと
何れと
何れと

めちち 八の巻の盛りと
めちち 八の巻の盛りと
めちち 八の巻の盛りと



内はあつた
内はあつた
内はあつた

阿部新助

とすき ちきよ あん ちきよ
お母の長く速くお母の机をさぐりて母の

お母の機をさぐりて母の
お母の機をさぐりて母の

お母の機をさぐりて母の
お母の機をさぐりて母の

お母の機をさぐりて母の
お母の機をさぐりて母の

お母の機をさぐりて母の
お母の機をさぐりて母の

お母の機をさぐりて母の
お母の機をさぐりて母の

お母の機をさぐりて母の
お母の機をさぐりて母の

お母の機をさぐりて母の
お母の機をさぐりて母の

お母の機をさぐりて母の
お母の機をさぐりて母の

お母の機をさぐりて母の
お母の機をさぐりて母の

お母の機をさぐりて母の
お母の機をさぐりて母の

お母の機をさぐりて母の
お母の機をさぐりて母の

お母の機をさぐりて母の
お母の機をさぐりて母の

お母の機をさぐりて母の
お母の機をさぐりて母の

お母の機をさぐりて母の
お母の機をさぐりて母の

お母の機をさぐりて母の
お母の機をさぐりて母の

お母の機をさぐりて母の

お母の機をさぐりて母の





芳川春濤閣

女化福荷大明

奉為山品

初編中



つぎ 交か出来まふ
 奥へ歸ゆまお女の
 舟仲と三つお引切り
 我留か女を志と晴まか
 よめ始かおしふ金と
 穢り戻しとらなる
 ニツにツの返り
 ばぬ内へ
 たつとも
 此の世と段々
 髪を落して結をひき
 おまへまぐお竹が
 那程の大金は何は

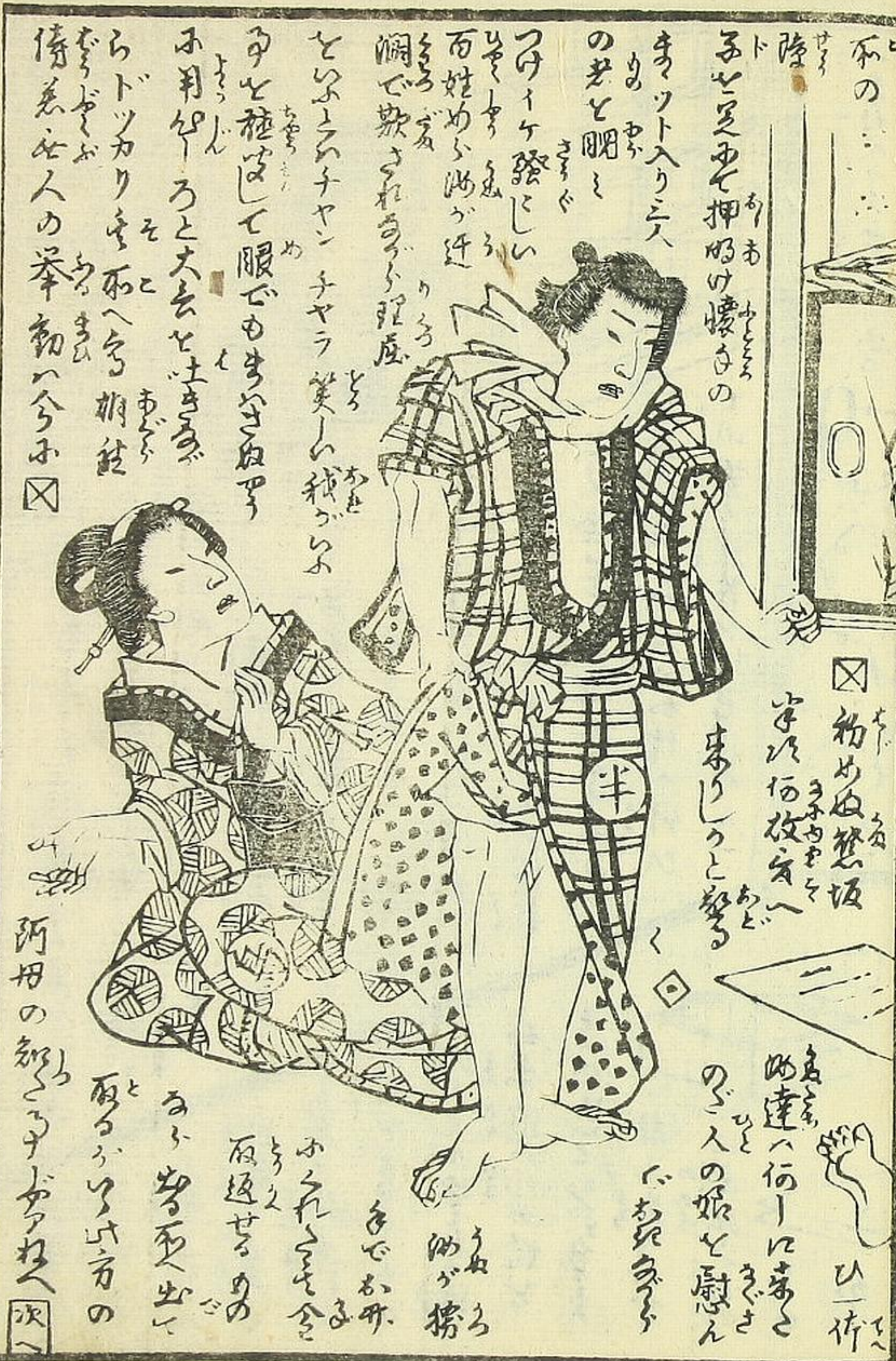


昔うぬ若志と由逃とるん
 そとけ場と船以我等と
 返しとる程は何更う
 落す子とあらう如
 小幻と梅号とする
 とゆえま
 手取りと
 兄子と
 おまが
 消て
 失うる若いの納
 あらうは涙目とお
 手う我若か今う

中からねど寝が一あで
 どのいふ証據のあふまへ
 呼吸調べて
 又尋るか上か
 不金肉且服
 どのも戻つて
 事かまらであらうとか
 せほと共々のうまに又教
 ま下女小云付け腰きく探せと氣不
 又ねがねの換手と又知て逃亡世心え
 ばとらじこののと起つ馬の涙まはと人
 小向ひまらう通うの流舟のあか休が若未や
 足付るを控縁と願ふと怒め共いッま金



林くやらうと三人
 均しく兵隊わい
 のけ
 実
 次の水
 奥へ入ん
 とする岡
 揚子の方
 小聲高く静
 うらりと

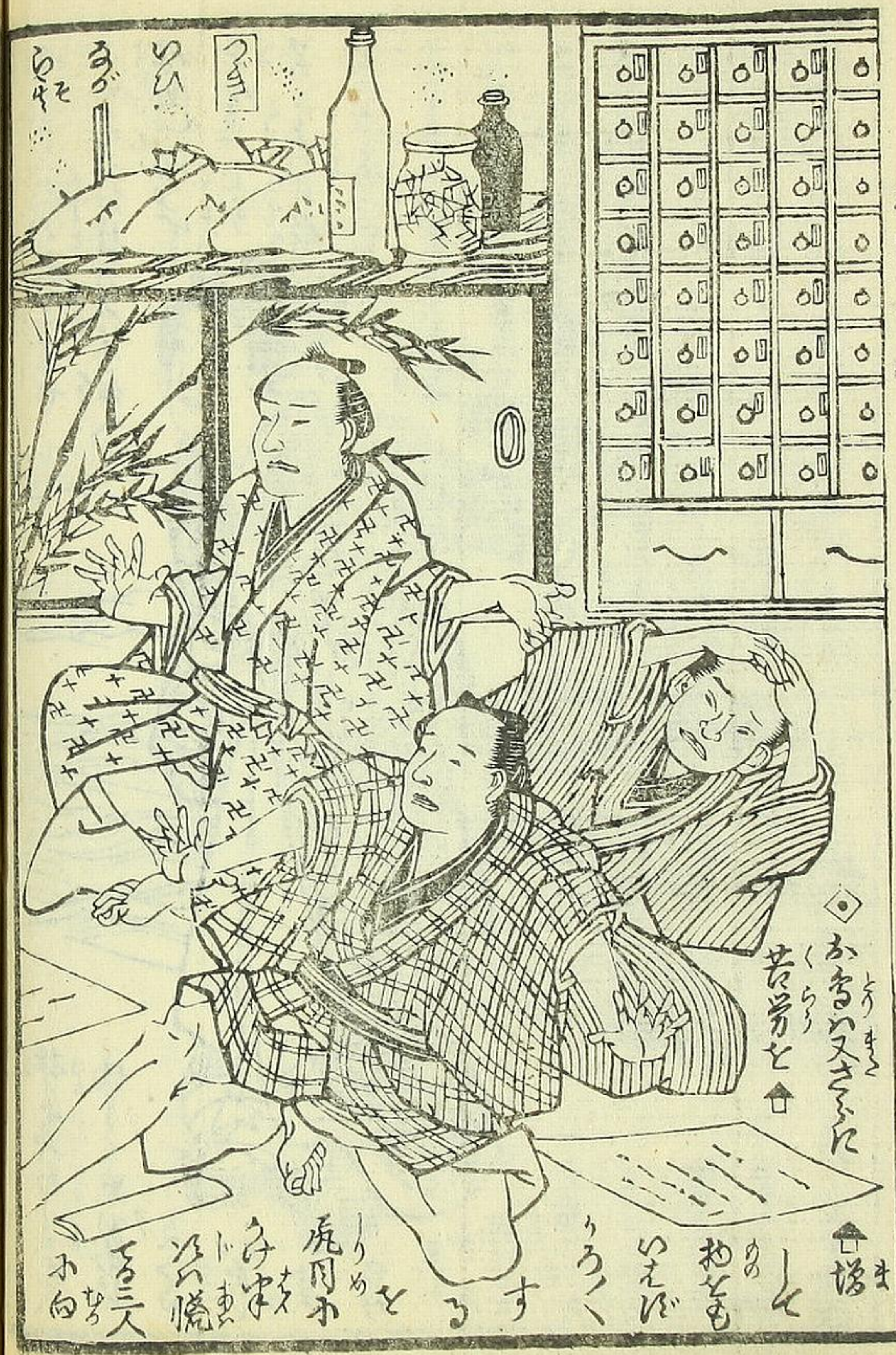


雨の...
 子と足中を押ぬけ懐の
 まつり入り入る
 の老と明
 つみいけ發じい
 百姓めらぬが近
 濁で敷されぬる理成
 といふとちヤンチヤラ笑し秋がら
 ちと種ばして眼でもまぶさぬ
 不判知ると大ととまき
 らトツカリそあへる相結
 傍表を人の挙初へ今ふ

物めぬ態坂
 字次何故なへ
 来りしうと怒る
 ひ一竹
 此達へ何しにま
 の入の娘と慰ん
 ちあ死多
 うぬろ
 ぬが務
 ちでお丹
 かくれこそ金
 百返せりもの
 ちり考更出
 雨のうけ方の

口町竹口

阿母の知るうすぢが杖



雨の...
 子と足中を押ぬけ懐の
 まつり入り入る
 の老と明
 つみいけ發じい
 百姓めらぬが近
 濁で敷されぬる理成
 といふとちヤンチヤラ笑し秋がら
 ちと種ばして眼でもまぶさぬ
 不判知ると大ととまき
 らトツカリそあへる相結
 傍表を人の挙初へ今ふ

物めぬ態坂
 字次何故なへ
 来りしうと怒る
 ひ一竹
 此達へ何しにま
 の入の娘と慰ん
 ちあ死多
 うぬろ
 ぬが務
 ちでお丹
 かくれこそ金
 百返せりもの
 ちり考更出
 雨のうけ方の

口町竹口

阿母の知るうすぢが杖

こつ竹の中



▲あらうする娘の不才
 持今さくら此より冷たけ
 札ど村心あうその破さ
 戸懸板小信
 とうてす
 勢いのま
 村の丸を秋
 くとりま
 命と徳乗の代わ仕送ひと
 時分や今あつたはも
 なつうこめたこま
 小よ智摩不して

かーいさつら
 昭かど迷惑
 一併サ係
 一今さ
 破板小さ
 是ぞ大
 合せ
 うりま
 うかが
 なな
 三のり
 せい
 しまりて
 次

女附不口



Ⓐ ぐつけるふ今の仕儀
 値等とを尾うく遂返せー
 先き阿母が此報と解と
 のれこの阿の存いささう
 のすまはく
 以事幾久く可ぞがう下
 さるのまを
 せりやと夢ひー

Ⓐ 控屈でさう取法
 考園
 ありよと
 俄うに
 せり
 とは
 成程の
 りそりかお
 が法さお
 飴儀
 の家
 若横人

か法さお
 飴儀
 の家
 若横人

島	鮮	堂	畫	帖	折	本	錄
芳年	廣重	廣重	廣重	周延	房種	廣重	
善惡教訓圖解	大日本神社佛閣全	東海道五十三次全	德川年代記事全	古今名婦傳全	花鏡東京名所全	龜地本錦繪問屋	
上	全	全	全	全	全	島鮮堂	
藤	周重	房種	周延	房種	廣重	網島龜吉	
善惡雅教訓全	俳優忠臣藏全	花鳥かぶ美全	常盤之園全	命養生善惡鏡全	開化東京名所全		
全	全	全	全	全	全		





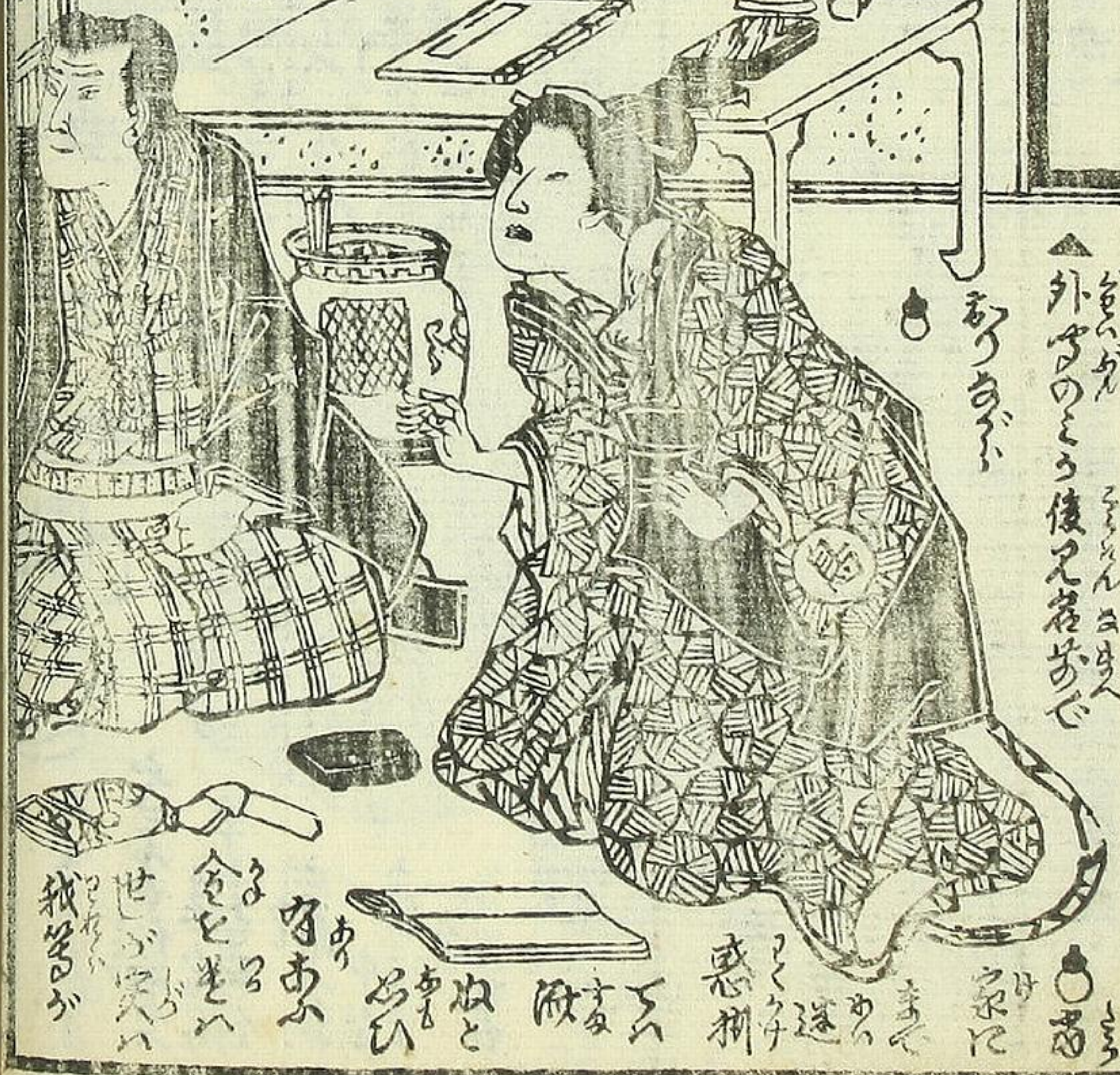
櫻齋房種色

岡本起泉綴

初編下



〇 幸國を立返りし内内
 〇 幸國が親方に罵る
 〇 幸國の形骸を
 〇 幸國の弟将面を
 〇 幸國の面刺と標を
 〇 幸國の面刺と標を
 〇 幸國の面刺と標を
 〇 幸國の面刺と標を



外方のとう後見若衆で
 ありあふ

〇 幸國の形骸を
 〇 幸國の弟将面を
 〇 幸國の面刺と標を
 〇 幸國の面刺と標を
 〇 幸國の面刺と標を
 〇 幸國の面刺と標を

〇 幸國を立返りし内内
 〇 幸國が親方に罵る
 〇 幸國の形骸を
 〇 幸國の弟将面を
 〇 幸國の面刺と標を
 〇 幸國の面刺と標を
 〇 幸國の面刺と標を
 〇 幸國の面刺と標を



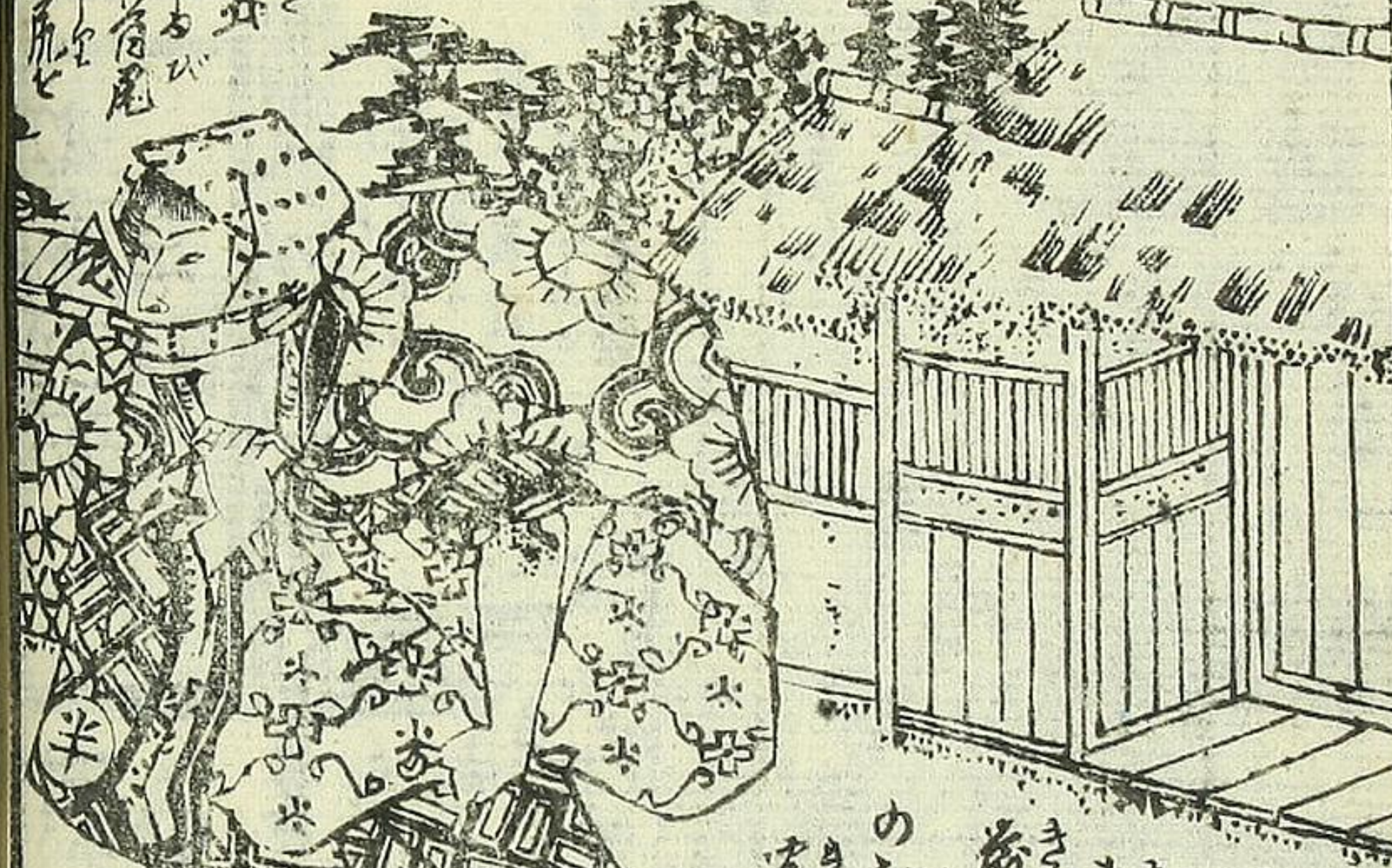
〇 幸國を立返りし内内
 〇 幸國が親方に罵る
 〇 幸國の形骸を
 〇 幸國の弟将面を
 〇 幸國の面刺と標を
 〇 幸國の面刺と標を
 〇 幸國の面刺と標を
 〇 幸國の面刺と標を

清久流
 村の玉尾
 左男の身へ
 孫ト二百
 田の支分
 金を貰ひかけ
 以茶の金セ
 債ひの券
 お竹とまの
 世と云做一首尾
 よく不都合の尻と

主人の身と母ひ有金令
 子と控渡以半た共返電一
 未初とひの玉尾分で大に怒り
 廣しくお書更掛合いが名不あ知
 の教主人を子ハ星瀬巨と控れど
 まぬ悠然状態様さる料とを

金の半々返存と
 六之又の如圍るま南が
 配割が竹
 が左取と

半
 元世一上波と



竹が竹の
 尻へ取小まの
 らるる人と
 たして別宅
 同密々小まの
 と信入と
 婿一むのそ
 後教を保小成一人也
 上るも不都合が有常り
 主人の身中も入に換子
 小言一程元へ引渡されど
 身の小言一むも由末
 ぬと寸小飾り或後



如弟小妻とるう返激せと一時のくれ
 御中場と御世が在取の如也ぬ
 由程りよお候へ小まの
 侍あり且
 本更候
 迎えま
 ついて取
 竹の

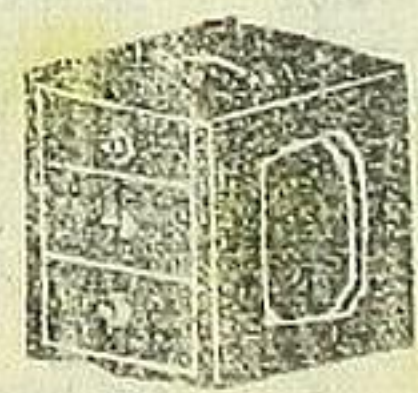
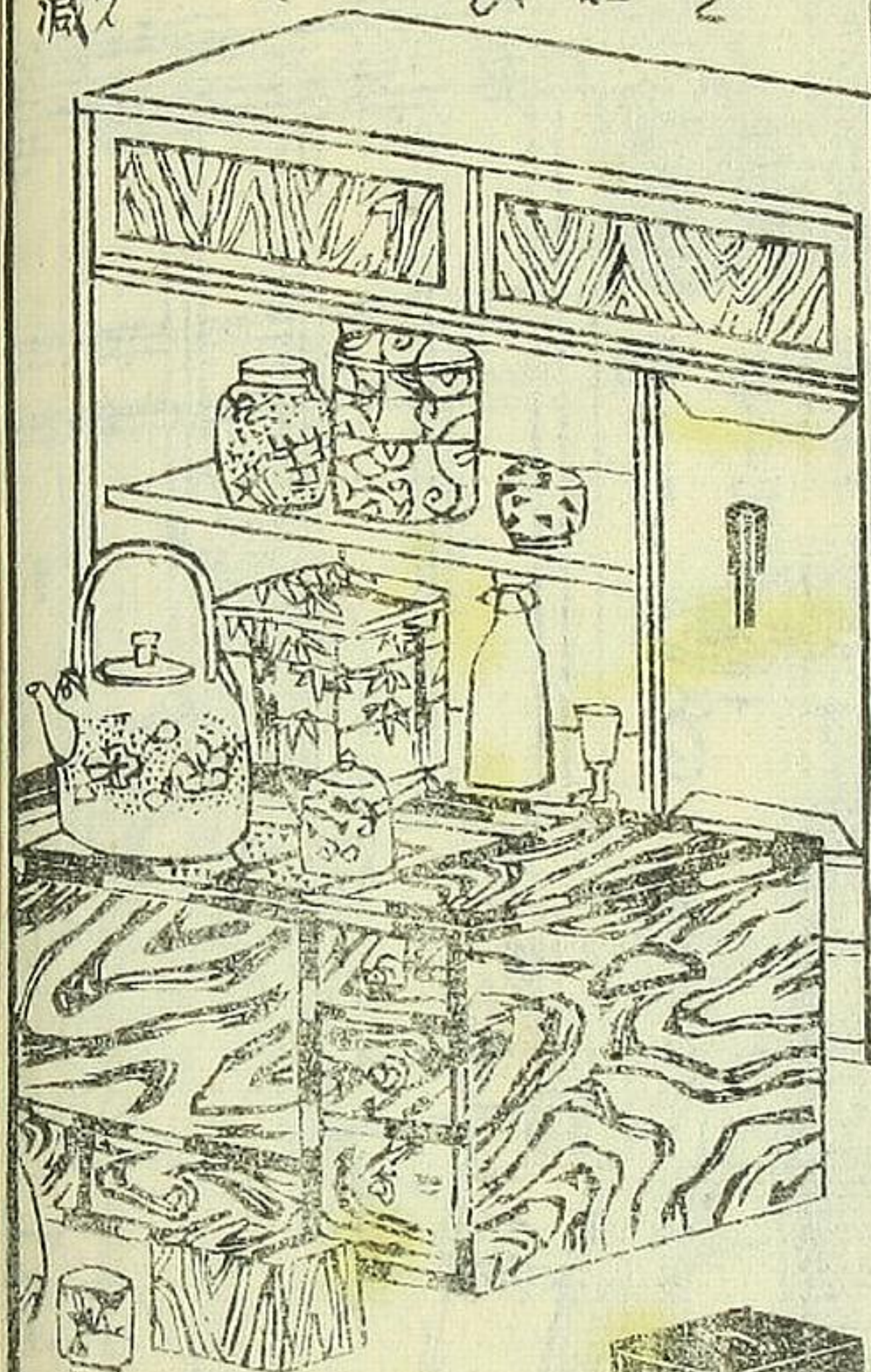
金子と
 路用もつきの檢の態様ま
 御書の控さ又書られぬ様のを
 御書渡りて兼て知る御書渡の
 御書渡りて兼て知る御書渡の
 御書渡りて兼て知る御書渡の

次へ

いさあむの傍ふ方るはまたが
もはきき
おぼろく久しく遠方へゆて
おて玉油法どたが今後
兼者方まを戻りしゆる也

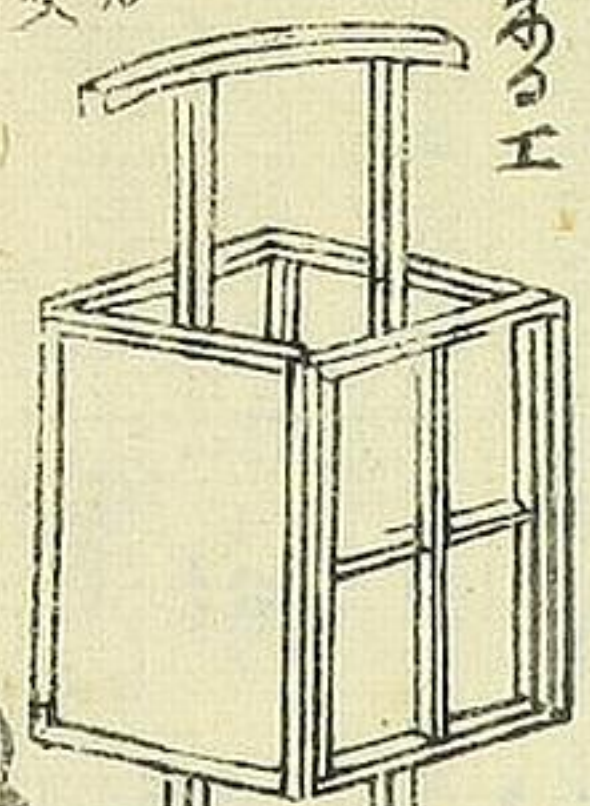
あも
尋ねて

ゆはらぬはれど
一歳年不認
合せしと多ひ
ゆえの揃合
白れは地へ
ハ出向する
かすぬり加減



去浦へゆゆけぬ
アうにふかひ骨しと
冷ききみと忠孝未
に雁しと筋め由
つすはてしこ目い
病家と
云はし
訓際
の客
さ
あろ
て自分
の都屋へ

おとて来る工
面じて
とゆふ文
面きぬか井の表ひ窓
くお取あひの寺の返りせ
送るあはれ
まよふももも
送著去浦の旁とのそ
眺めて身元花鳥を眺む
何とほしと遊遊さんと工まを
されと下る



おとて来る工
面じて
とゆふ文
面きぬか井の表ひ窓
くお取あひの寺の返りせ
送るあはれ
まよふももも
送著去浦の旁とのそ
眺めて身元花鳥を眺む
何とほしと遊遊さんと工まを
されと下る

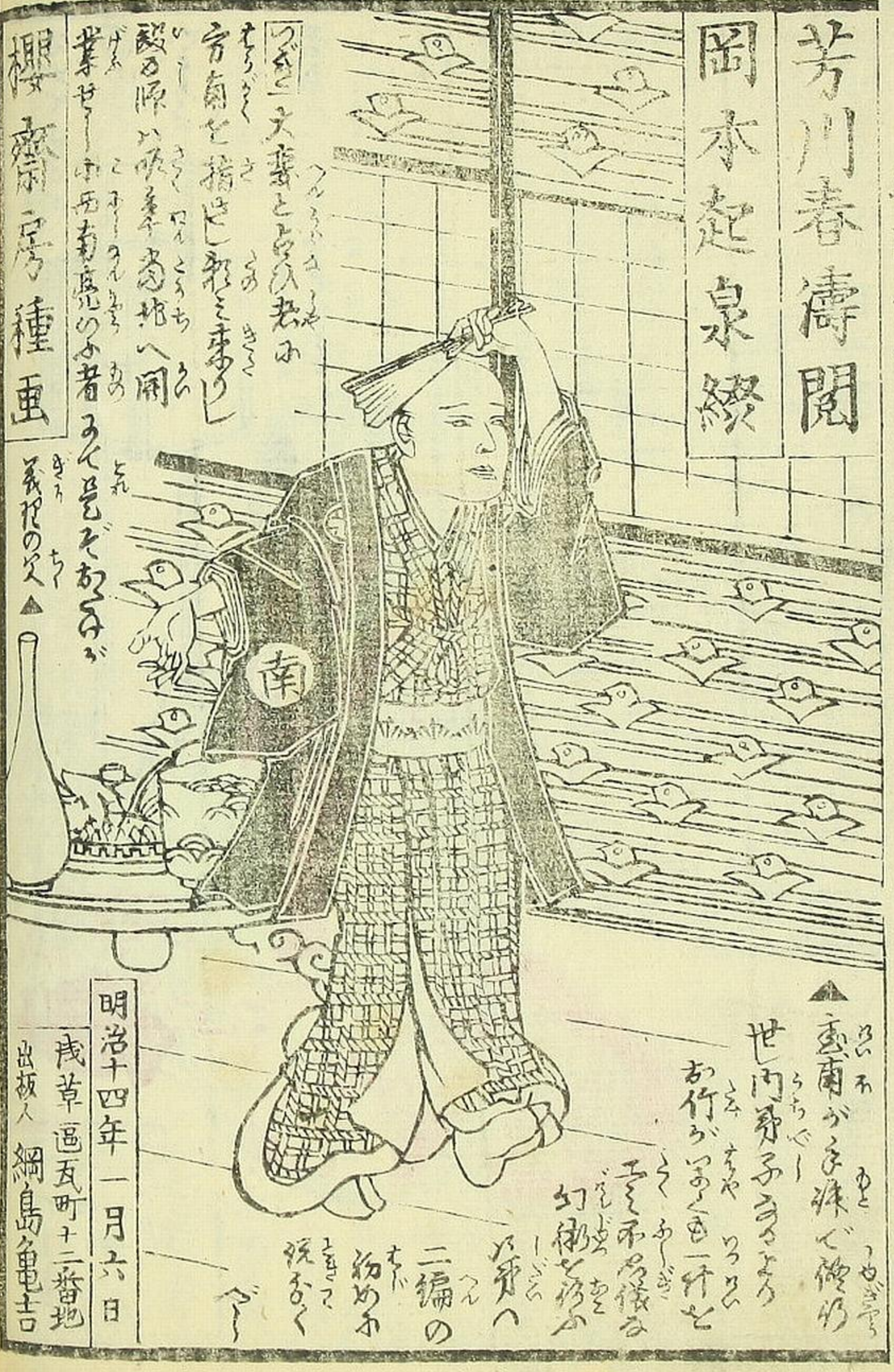
おやんくさ
掛るもふさり結ゆ



あひとめがらはと知ぬ
ま人の徳三弟へそり
の玉小娘ふりれてい

010190513543

島	鮮	堂	畫	帖	折	本	錄
善惡教訓圖解	大日本神社佛閣全	東海道五十三次全	德川年代記事全	古今名婦傳全	花鏡東京名所全	龜地本錦繪問屋	島鮮堂 綱島龜吉
芳年	廣重	廣重	周延	房種	廣重	島	
善惡教訓圖解	大日本神社佛閣全	東海道五十三次全	德川年代記事全	古今名婦傳全	花鏡東京名所全	鮮堂	綱島龜吉
上	全	全	全	全	全	堂	吉
藤	周	房	周	房	廣	島	
善惡雅教訓全	俳優忠臣藏全	花鳥かぶ美全	書經之圖全	命養生善惡鏡全	開化東京名所全	鮮堂	綱島龜吉
全	全	全	全	全	全	堂	吉



芳川春濤閣
岡本起泉綴

櫻齋房種画

大妻とよひおの
方角を指しおのまの
酸の原は吹雪を地へ開
業せし中五右衛門の者みくはるおのまの

南

明治十四年一月六日
浅草區五町十二番地
出版人 綱島龜吉

▲ 香雨が子珠を飾り
世内をふりまわす
お竹が...
幻術とやら
二編の
初め
後



まほろし

お井尊の

少書初編

よゝ川喜海完

園あり起泉終

操るる田乃てひ画

高野聖持

